

6-1 取り除けない副詞要素(1)

— SVOA

1 副詞要素=取り除ける、とは限らない

ここまで折にふれて言及してきましたが、副詞句に関しては、「文の要素を構成することはないので、取り除いても文が成立する」と思われている(もしくはそう教わった)方がいらっしゃるはずですが。

しかし、実は副詞句であっても文の要素の一部となり、取り除くことができない場合があることは、p.051で見たとおりです。

- He lives in Yokohama. 「彼は横浜に住んでいる」
S V M (=A)

このin Yokohamaを取り除いたHe lives. (×) が不可であり、このように取り除くことのできない副詞句(M)を「付加詞」(Adjunct = 略称A)と呼ぶこともすでに述べました。また、in Yokohamaは実質的にHe is in Yokohama.のように、主語である彼の状態を説明しています。上の文は従来の五文型理論ではSVの第1文型とされませんが、副詞句を伴わなくとも成立する純粋なSVとは言えず、いわばSVAというパターンになると言えます。

2 SVOAというパターン

ところで、取り除けない副詞句が登場するパターンには次のようにSVOの後ろに副詞句を置く、〈SVO + M〉タイプのものもあります。

- He put the book on the desk. 「彼は本を机の上に置いた」
S V O M

このon the deskは「机の上にある本」のようにthe bookを修飾する形容詞句ではなく、動詞putにかかる副詞句なのですが、SVAの場合と同じように、このon the deskという副詞句を取り除くことはできません。

He put the book. 「彼は本を置いた」☞ どこに???

putという動詞は、ただ「O(目的語)を置く」というだけではなく、「どこに置くか」という「場所」を表す語句が必要になります。これはlive(住む、暮らす)が「どこに住む、暮らすのか」を表す語句を必要とするのに似ています。つまり、**場所を表す要素は、単なる修飾語ではなく、文の要素として必要な付加詞(A)なのです。**putの場合は、Oの後ろにhere = 「ここに」(副詞)、on the table = 「テーブルに」(副詞句)、where it was = 「もとあった場所に」(副詞節)などの副詞要素が必要になり、これらを取り除くことはできないのです。

- He put the book here.
S V O M (A: 副詞)
「彼はその本をここに置いた」
- He put the book where it had been.
S V O M (A: 副詞節)
「彼はその本をもとあった場所に置いた」

3 OとAの関係は?

[2]の最初にあげたHe put the book on the book.という文では、「彼がputした結果」⇒「その本は机の上に存在する」という関係が成立していることにお気づきでしょうか?

Heがputした結果 ⇒ The book is on the desk.
S V M

ということは、He put the book on the book.という文では動詞putの後ろにThe book is on the desk.というSVAの文が隠れていると考えることができます。この場合もon the deskは取り除くことができないので、副詞句ですが付加詞ということになります。

He put + [The book is on the desk].
S V [S V A]

こう考えるとすでにお気づきだと思いますが、第4章でSVOC(第5文型)の場合にふれた「OC=もう1つの文の埋め込み」(p.107)と

いう考え方に限りなく近くなると言えます。

4 (S+V+X+前置詞+Y) というパターンの場合も

p.139でも扱った〈regard X as Y〉と同じく、〈prevent X from Y〉(XがYするのを妨げる)、〈devote X to Y〉(XをYに捧げる)や〈tell X from Y〉(XをYと区別する)など、動詞の中には、目的語の後ろに「前置詞+名詞」を伴い、〈SVO + [前置詞+名詞]〉というパターンで用いられる表現があります。

- Heavy rain **prevented** Mary **from** going out shopping.
S V O 前置詞+名詞(動名詞)

「大雨がメアリーを買い物に出かけるのを妨げた」

→ 「大雨のせいでメアリーは買い物に出かけることができなかった」

- He **devoted** his life **to** the research.
S V O 前置詞+名詞

「彼は生涯をその研究に捧げた」

- He can't **tell** right **from** wrong.
S V O 前置詞+名詞

「彼は善悪の区別ができない」

p.139でも述べたように、これらのパターンの表現を従来の五文型理論で分類すると、「主語+動詞+目的語」の部分が骨格となり、「前置詞+名詞」の部分は、「副詞句」(M)として説明されるため、SVOの第3文型になってしまいますが、この「前置詞+名詞」は本当に単なる「文の要素にならない動詞修飾の副詞句」として考えてしまってよいのでしょうか？

- Heavy rain **prevented** Mary.
「大雨がメアリーを妨げた」⇨ 何をするのを???
- He **devoted** his life.
「彼は生涯を捧げた」⇨ 何に???

特に、tell X from Y から from 以下を取り除いた場合、そもそも tell 自体の意味が「区別する」という意味であることが特定できなく

なってしまいます。

He can't **tell** right. (???)

このような〈動詞+X+前置詞+Y〉というパターンの場合、「前置詞+名詞」の部分は今のtellのように動詞の意味自体を決定するのに欠かせない要素、すなわち付加詞(A)とみなすことができます。つまり、全体はSVOAというパターンと考えられます。

また、putの場合と同じく、OAの部分にはSVAに相当する文が埋め込まれていると考えることができます。

- Heavy rain prevented [Mary **from** going out shopping].
S V O ↑ A
Mary is **from** going out shopping.
S V A

前置詞fromは「...からの分離」が基本的な意味です。ここから、Heavy rainがpreventした結果 → Mary is from going out shopping. 「メアリーが買い物に出かけることから分離する状態になる」→「買い物に出かけられなくなる」を意味することがわかります。もうお気づきと思いますが、4-10(p.139)では、このようなパターンをSVOに準じて考えることの利点にふれました。一方、p.054ではSVAはSVCの文と本質的には変わらないことを述べています。ここをSVOAとSVOのどちらととらえるにせよ、〈O + [前置詞+名詞]〉の部分が実質的に文の埋め込みであることを理解できれば、このパターンの合理的な解釈と運用ができることはおわかりいただけるでしょう。

このような特定の前置詞と結合し、〈動詞+X+前置詞+Y〉というパターンを構成する動詞については次項でさらに考えていきます。

まとめ

- 副詞要素は単なる修飾語として取り除けるとは限らない
- 特定の動詞とともに使われる副詞(句)は取り除けない要素=付加詞(Adjunct)としてSVOAのパターンを構成することがある